

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	特定非営利活動法人鳥の劇場	
施 設 名	鳥の劇場	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	30,397	(千円)
公 演 事 業	20,736	(千円)
人 材 養 成 事 業	8,444	(千円)
普 及 啓 発 事 業	1,217	(千円)

(2) 平成31年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	小鳥の学校	2019.7～2020.3	小学校4年生から中学校3年生までの演劇を使った人材育成事業。講師:中島諒人・大岡淳・上田假奈代	目標値	20
		鳥の劇場		実績値	20
2	高校演劇もっと盛り上げ事業 つくる高校生	2019.6～8/ 2020.3	高校生、もしくは中学を卒業してから18歳までを対象に行う人材育成事業。演出家:二口大学	目標値	20
		鳥の劇場		実績値	19
3	若手演劇人の作品向上、 社会との関係づくり支援事業	2019.7/2019.11	対象:わが街の小劇場、公募で集まった若手演劇人5名 研修会講師:中島諒人・志賀亮史・五島朋子・杉山準・松本智彦等	目標値	15
		鳥の劇場		実績値	11
4	お年寄りのお年寄りによる みんなのための演劇	2019.7～11	演目:『女殺油地獄』 スタッフ:齊藤頼陽・大川潤子 出演者:足立雅子・石賀ますこ等	目標値	10
		鳥の劇場		実績値	6
5	コミュニティダンサーのための 講座	2019.6.29～7.7	ワークショップ講師:余越保子・福岡さわ実・渋谷陽奈等 クリエーション ワークショップ講師:余越保子	目標値	30
		鳥の劇場		実績値	9
6	大学連携	2019.4～2020.1	インターンシップ:北海道教育大学 岩見沢校より2名 鳥取大学への講師派遣:中島諒人等	目標値	10
		鳥の劇場・鳥取大学		実績値	3
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割(ミッション)や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

■事業の組み立て

1 世界状況が混迷を極める先行き不透明状況の中で、演劇を観ることの喜びや意味を多くの観客に届けることができた。

5月の上演では、小さい演劇作品を複数と体験プログラムを組み合わせ、親子連れを中心とした多くの観客に、劇場の魅力を知らせてもらうことができた。情報通信技術の飛躍的で怪物的とも言える発展の中で、演劇や自然に出会い、その中に没入して全身で遊ぶという人間的な喜びを求める人が増えており、その古くて新しい本質的需要に対して、豊かな自然の中にある当劇場が果たしうる役割の可能性をますます感じている。一方、『剣を鍛える話』や『プレヒト版「アンティゴネ」』では、現代演劇の力を存分に発揮した。『剣を鍛える話』では、古代の民話を踏まえた魯迅の近代批判を、遠いようで今ここの出来事として観客に届けることができた。『プレヒト版「アンティゴネ」』では、ソフォクレスによる紀元前ギリシャの原作、プレヒトによる第二次大戦後の改作、そこに現代日本と世界の政治状況を重ねることで、多くの観客の支持を得た。翻訳者谷川道子氏を招いてのトークも大変好評であった。

2 幅広い人材養成が実施できた。

劇場での子ども対象事業、高校生対象事業、高齢者対象事業、全世代を対象にした事業などにより、若年から高齢までもらすことなく演劇の楽しさや知恵を届けることができた。また、劇場人としての専門性向上のために「コミュニティーダンサーのための講座」、「若手演劇人の作品向上、社会との関係づくり支援事業」も、当劇場オリジナルの充実した取り組みとなった。

3 学校現場でのアウトリーチ

小中学校や特別支援学校に出向いての、ワークショップや学習発表会の支援が毎年ニーズが高まっている。「地域に演劇力お届け事業」はそれに応えたもの。コミュニケーション力などの非認知スキルの向上のために実施している表現ワークショップ(本助成金対象外)の実践を通じて蓄積・錬磨した指導方法や経験も生かし、児童生徒の多様性を認める汎用性の高い指導を行い、学校現場で好評となっている。これらにより、演劇の力と常駐する専門家集団の力をフルに生かした多面的事業の組み立てができた。この多面性がとりわけ地方では重要である。大都市では娯楽性／芸術性／児童演劇／教育／福祉など、それぞれに担い手が細分化される傾向があるが、地方ではそのような分担は不可能であり、担い手も当劇場以外にほぼ存在しない。活動の多面性が演劇の力を劇場から学校等につないでいく契機となり、さまざまな現場での経験や知恵の蓄積が、アウトリーチの質の向上や効率性の向上につながっている。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

文化的、社会的意義は、おおむね上記の通りである。「助成に値する」という問いが、助成する側から出るのは当然であるが、「値する」がコストパフォーマンスを問われているのだとすると、助成を受ける事業実施者がコスパについての妥当性を判断するのは正直困難である。しかし、本助成がなければ、今年度の当劇場による事業は、ほぼ全て実施できなかったし、助成を起点にして妥当性を語ることは困難であるが、実施されたことやそのアウトカムを起点として助成を見ると、必要不可欠で巨大な意味のある助成だったと間違い無く言える。経済的意義については、該当年において、継続的雇用、観光、物販などの効果を生んでいる。長期的な視点で見たときに、助成による事業実施が、地域への愛着や誇りを醸成し、IターンやUターンを生み、教育との関わりが独自の地域運営につながっていくなど、波及的な意義は大きい。具体的なエビデンスで示せることが多くないのが残念である。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

・公演事業

次の5項目を目標とした 1、地方なのだが上質で先端の芸術の現場を 2、より多くの観客との出会いを 3、家族と一緒に、子どもと一緒に楽しめるあたたかい場を 4、中国四国地方におけるオンリーワンの芸術拠点としての発展を 5、演劇公演を軸とした「1日の新しい楽しみ方」を立案し試行する

5月、11月、2月に公演を実施した。どの公演でも、上記目標を追求し、高い水準で達成できた。特に5月公演について触れておきたい。この公演は子どもも対象にしたもので、お年寄りまで幅広い客層に劇場の魅力を伝えることができた。

来場者の居住先は、鳥取県内からの来場者が多い傾向にあった。県外から帰省した家族や、帰省した親子で来場する姿があった。家族で鹿野の町で1日楽しんでもらうことを目標に、観劇をメインに、たけのご掘り、ちまきづくりなど、子どもの日に困んだ様々なプログラムを用意した。ちらしにも、鹿野町のまちあるきマップを掲載し、昼休憩も2時間と、ゆったりとまる1日過ごしてもらう仕掛けを盛り込んだ。純粋な観劇とは違う取り組みであったが、劇場の楽しみ方の発信として、新たな形を打ち出せたのではないかと考える。来場者アンケートからは、(1)お子さんの割合が高いこと(2)子育て世代の来場率が非常に高いことが読み取れる。鹿野という立地を生かした、親子で一緒に観劇することを促す鳥の劇場らしい企画であった。本企画は、今後も継続して行なっていきたい。

・人材育成

プロの若手演劇人の育成と一般市民(子どもからお年寄りまで)を対象とした演劇の楽しみの普及とコミュニケーション能力等の育成を目標とした。

若手演劇人に対しては、5人の若い演出家が、鳥の演劇祭開催期間に滞在した。観客や様々な上演団体との多様な化学反応が起こる演劇祭の場で、演劇人が職業人として持つべきスキルについて考え、意見交換を行ったことは、参加者の今後の成長にとって非常に大きなインパクトがあったようだ。

一般市民を対象にした事業は、小中学生、高校生、お年寄りを対象に実施。高校生を対象とした事業では、夏に韓国安山市の高校生との交流を実施を予定していたが、日韓関係の緊張の中、安山市の高校生の来日が中止となった。高校生の保護者や日韓関係者の真摯な議論と準備の上で、鳥取の高校生は予定通り韓国を訪問、交流と上演を実施した。国際政治に民間の交流が影響を受ける事態で、マスコミでも大きな注目を集めたが、交流の実施は両国の高校生にとって計り知れない大きな意味があった。

・普及啓発事業

戯曲をともに読み解釈してみる座学の講座、夏休みの小学生を対象とした劇場の仕事体験、アウトリーチ活動として学校等に出かけて小さい上演やお芝居づくりを手伝うなどの事業を実施した。演劇の専門家集団が、地域の公的な資源として、新しい喜びや楽しみを提供するとともに、地域発展のための学びの機会を提供するという目標を、広範囲にしっかりと果たすことができた。人材育成を通じてのコミュニティへの貢献は、劇場が示しうる最もわかりやすい貢献であり、その機会の拡大と質の向上は、常に重要な目標である。

・全体を通じて

大小織り交ぜて11の事業を、本助成金のもとに実施した。どの事業も、過去の実践を通じてのPDCAサイクルの構築により、ある程度練り上げられたものとなっており、それぞれの事業目的に照らして高いレベルで目的を達成できた。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

当劇場の事業は、設立から現在まで一貫して、構想・立案>実践>確認>修正・向上・洗練という PDCA プロセスを踏みながら継続している（廃止したり全面改訂した事業もある）。限られた人材、資金、時間を最大限に生かすために当然のことである。事業の進行中、終了後に、劇場スタッフの間で課題や改善点を共有し、事業価値の最大化と機能強化、さらには次回事業実施の質的向上につとめている。柔軟さ、迅速さはコンパクトな芸術家集団だからできる組織的強みである。

◆事業期間について

本年度事業で、期間等について当初の予定と大きく変更があったのは、年度末3月以降、新型コロナウイルス感染拡大後だった。具体的には、「子どものための小鳥の学校」「高校演劇もっと盛り上げ事業(後期)」。鳥取は感染拡大がかなり抑えられている状況の中で、感染症への対応と事業をどのように両立させるかについて、日々刻々と変わる状況の中で、議論、準備、変更を繰り返した。特に、事業が子どもを対象にしたものだったので、社会的に説得力のある慎重な対応が求められた。それに伴い、劇場スタッフが、通常は JR で劇場に来る参加者を遠方のエリアまで送迎したり、保護者対応などで、予期しない多大な業務が発生した。2月以降のことであったので事業期間に大きな変更が生じたわけではないが、実施のための業務が一気に膨らんだ。しかし、感染症対策を十分に施して行った「小鳥の学校発表公演」は、大きな話題となり、劇場の存在意義をコミュニティーに示すことができた。

その他の事業については、想定された準備期間内で計画を実行できた。

公演だけでなくさまざまなされるべき事業を並行している中で、あるいは費用的な制約の中で、公演のためのリハーサル時間をもっと多く確保したいが、必ずしもそれが十分とは言えない部分があり、悩ましいところである。

◆事業費について

劇場を演劇愛好家だけのものではなく、コミュニティーのより良い未来構築のために必要不可欠の公共的な知的拠点とすることが当劇場のミッションである。それを裏から言えば、コミュニティーの中で舞台芸術家が誇りを持って生活し、周囲からもその仕事を尊敬される状況を作ることである。時間をかけて作品づくりを行い、24時間365日を舞台芸術家として生きる。誇りを持ちながら生活を支え、家族を支え、10年先 20年先の未来を演劇を通じて社会に貢献するものとして見通すことができる。そのための報酬を劇場が支払うことができるのか。それは当劇場の課題であるし、劇場文化を公共性の高い仕事と位置付けるのならば、広く社会的に議論されるべきことだろう。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった(と認められる)か。

地域の文化拠点という言葉はまさに鳥の劇場の存在にふさわしい。文化芸術がそこで創造される現場であり、外国も含めて一線のアーティストがそこを訪れる交流の場であり、一般の人々に鑑賞機会を提供し、鑑賞だけでなくワークショップなどを通じて、さまざまな体験も提供する場である。そこで活動している舞台芸術家は、地域に暮らし、地域の喜びや困難を多くの人々と共有しながら、創作活動を展開している。

一つ一つの事業の創造性の前提として、演劇芸術に対する信頼と希望を強く持つ演劇人の集団があり、より質の高い創作ためにコツコツと改修された施設や必要な機材などを備えている。ハードのみの劇場が多い中で、人の創造性を施設や設備が支える希少な場である。

◆鳥の劇場の活動

鳥の劇場は、まずは演劇を創作する劇団としてある。2006年に芸術監督中島諒人が出身地鳥取に戻り、劇場として活動できる場所を探し、鳥取県鳥取市鹿野町の使われなくなった小学校体育館と幼稚園に出会った。東京でいっしょに活動していた俳優やスタッフが、地域の中での活動に興味を持ち移住することで活動が本格化した。社会の中で演劇が尊敬され、劇場という場がコミュニティーの重要な拠点となることが、当初からの理想である。創作集団であることを中心にすえながら、地域のための様々な貢献を考え、提案し実践してきた。「演劇や劇場は地域の未来のために必要なものだ」と、多くの人に認識してもらうための挑戦を一貫して続けている。

組織はNPO法人(代表理事は芸術監督の中島)、メンバーは20名ほど。俳優、技術スタッフ、運営系のスタッフが、多様な仕事を兼務しながらフルタイムで活動している。

◆施設と現在までの経緯

旧小学校体育館と旧幼稚園園舎を鳥取市との契約で無償で借りている(管理費、修繕費などは鳥の劇場負担)。幼稚園の遊戯室は収容数100名程度の上演空間としても使えるし、劇場(体育館)での上演時には開演までの時間を過ごしてもらうホワイエとなる。上演後は、このホワイエでアフタートークも行う。

体育館を改造した劇場がメイン上演空間で、間口約12メートル、奥行き12メートル、高さ8メートルの舞台を持つ。客席は35センチピッチで9列のひな壇になっている。最大で200名の収容ができる。

劇場(体育館)は、耐震強度に問題があり老朽化もしていたので、2016年に鳥取県と鳥取市が改修工事を行ってくれた。そもそもこの施設は、04年の鳥取市と鹿野町の合併時の取り決めでは、壊されて校庭も含む敷地全部が駐車場となる計画であった。その計画が撤回され、施設の改修に変更されたのは大きな出来事であった。

改修費用は七千万余。客席や舞台機構の設備については、行政はカバーしてくれないので、そこは当NPOが約一千万円で実施。寄付と金融機関からの融資で対応した。

民間団体の活動のために、行政からのこのような柔軟で踏み込んだ支援が可能になったのは、やはり地域と観客の理解、応援が大きな力となっている。

◆年間の施設利用者(観客、見学、ワークショップ参加者など)は1万人程度。鳥取県内、周辺地域での認知度は高まっており、秋に開催の鳥の演劇祭は中国、韓国の演劇人からの注目も高い。民間の芸術団体による、人口最小県の中山間地における「創造性」ある取り組みとして、誇れる成果を発揮していると自負している。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた(と認められる)か。

当劇場の特徴は、演劇だけでなく地域の他分野の芸術家と多様に連携していることである。音楽家、写真家、美術家、舞踊家などと折に触れて交流の機会を作り、作品創作やワークショップの実施などに関わってもらっている。交流の多様さは、鳥取のコミュニティーの小ささ、人と人の距離感の近さにも支えられて、年々活発になっている。

特に若い世代(小中学生、高校生)の演劇への関心は高まっており、鳥の劇場での経験を通じて、芸術系の大学に進学する若者も出ている。

活動の継続によって「振興されてきた、盛り上げてきた」と感じられるもの。

観劇人口の広がり

演劇をやってみようという人の広がり

演劇を切り口とした他分野の芸術への興味の広がり(ダンスなど隣接分野や文学への興味など)

外国作家や外国劇団の上演を見てその国や文化への興味、関心、親近感

教育事業を通じての人材育成と保護者の芸術への理解

鳥取という地域への愛着や誇り

長期的な視点で取り組んでいる以下は、地域の文化芸術の発展にも有効につながっている。

■人材育成

・年間を通じての事業継続の中で若手制作スタッフや俳優の育成を計画的に行い、実力の確実な育成を行うことができた。鳥取県外から鳥取に移住して鳥の劇場の活動に加わりたいという人もあるし、地元出身で門を叩く人もある。いずれにせよ、地域に根づいての活動となっている。

・大学や公文協とのつながりの中で、たいへん優れた若手人材をインターンとして派遣してもらい、当劇場の繁忙期に働いてもらいつつ、劇場関係者やボランティアの人たちとも交流が生まれた。これも、地域の人材の育成にとって意味ある刺激であった。

■新規事業開発

・地域の課題やニーズに対して、演劇の知恵やノウハウを生かすことで新しい解を示し、地域の発展に貢献している。

・アウトリーチで幼稚園や学校に出かけていくことは、そのための重要な情報収集の機会であり、地域の未来への貢献である。

・学校現場でのワークショップ(小中高校で100時間以上)を、学校や地域との強力な連携のもと実施し、芸術への興味を惹起するきっかけともなった。

■ネットワーク

・メルボルン大学(オーストラリア)から、演出を学ぶ大学院生の1カ月間のインターン受け入れを実施。フランスからの要望もあり、国際的な学びの場としての認知も高まっている。地域との国際的つながりの深化は、文化芸術の振興にも有意義である。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した(と認められる)か。

収入を長期的視点の中でどのように増やしていけるかが大きな課題である。事業数は現状でもかなり多く、事業を増やすことではなく、現在行っていることからより収益を上げていくことを考えなければならない。公演の売り上げを増やす、寄付を増やす、ワークショップ事業の収益化などが考えられる。

・公演の売り上げ増について

幅広い客層に訴える上演メニューの多彩さ

先鋭的な上演だけでなく、親子連れの観客を巻き込むような企画を現在も行なっている。この種の上演を切り口に、カッティングエッジな上演の集客も増やしていくという戦略が有効である。劇場の楽しさ、体験の意味を広く伝えることで、集客増につなぎ、収益を少しでも上げて行かなければならない。

広報

上記目的に有効なのが広報である。2019年度からテレビCMや新聞折り込みなどを実施し、高い効果を上げている。この試みを継続したい。また、子どもも対象にした企画では、チラシの学校での配布が非常に有効であることもわかってきた。これらを組み合わせながら、集客、収益増につなぎたい。

海外公演

2019年のフランス公演の成功や中国・韓国での評価の高まりを背景に、海外公演で収益を上げていきたい。現地でも受け入れやすい作品を上手に選定し、ツアーをうまく組んで、受け入れ劇場と継続的で発展的な関係を築いていかなければならない。

・寄付増について

サポーターという形で寄付を毎年集めている。当劇場は毎年ゼロから資金調達をしなければならず、助成金の割合も低くないことから、用途を限定されない寄付は活動継続のために必要不可欠である。寄付者を一層増やすことが必要である。

・ワークショップなどの収益化について

演劇の知恵、俳優の専門性を人材育成や地域の持続的発展のためにつないでいく学校等でのワークショップ事業は、当劇場にとって大きな意味を持つ。当劇場のワークショップの特徴は、常駐する俳優やスタッフ集団の存在を背景に、複数人(五、六人以上)が授業現場に入り、グループワークに関わり盛り上げつつ、子どもの様子を観察、記録し、教員による振り返りに生かしていくことにある。この授業は、現場の教員との連携の中で、基本的にオーダーメイドで設計・実施している。人的資源の大量投下によって高い評価を得ているこの事業であるが、その実施への対価を誰にどのように負担してもらうかという仕組みが十分に確立されておらず(一部鳥取県に負担してもらっている)、それを進めなければならない。また、企業等を対象にした社員研修的ワークショップも、実施を検討している。